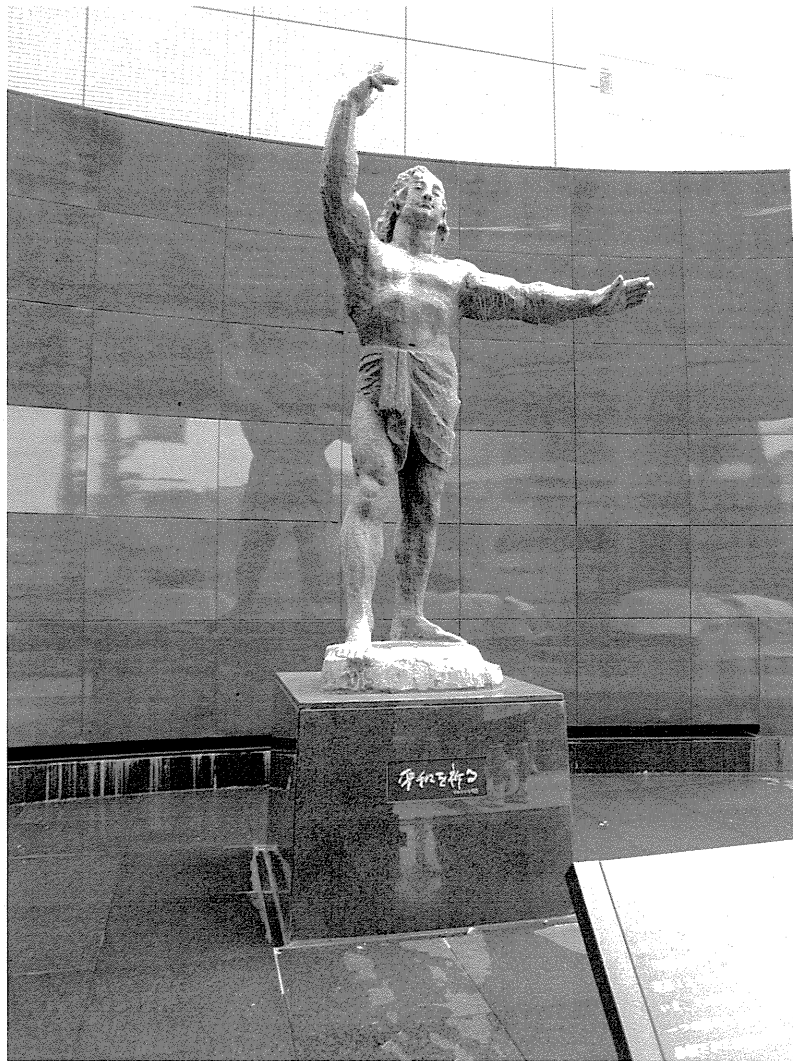


板橋区平和都市宣言記念事業
令和5年度 板橋区中学生平和の旅
感想文集



板橋区役所正面玄関前 平和祈念像／北村西望 作

板橋区平和都市宣言記念事業実行委員会
(板 橋 区 ・ 板 橋 区 議 会)

板橋区平和都市宣言

世界の恒久平和を実現することは 人類共通の願いである
しかるに 現実には 核軍拡競争が激化の様相を示し 人類
の滅亡さえ危惧されるところである

われわれは 世界で唯一の核被爆国民として また 日本
国憲法の精神からも再び広島 長崎の惨禍を絶対繰り返して
はならないことを強く全世界の人々に訴え 世界平和実現の
ために 積極的な役割を果たさなければならない

板橋区及び板橋区民は 憲法に高く掲げられた恒久平和主
義の理念に基づき緑豊かな文化的なまちづくりを目指すとし
ても 非核三原則を堅持し 核兵器の廃絶を全世界に訴え
平和都市となることを宣言する

昭和60年1月1日

板橋区

板橋区は、昭和60年1月1日に世界の恒久平和を願い、非核三原則を堅持し、核兵器の廃絶を全世界に訴える「板橋区平和都市宣言」を行いました。以来、この宣言を実りあるものとするため、現在に至るまで様々な平和都市宣言記念事業を実施し、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を訴え続けています。

「中学生平和の旅」は、『次世代を担う子どもたちに平和の大切さを伝える』ことを目的に実施しており、今年度は被爆地である広島に区立中学生を22名派遣しました。長崎平和の旅は台風の接近に伴い、平和祈念式典が主催者（長崎市）のみの縮小開催となったため、生徒の皆さんの安全確保を優先し、中止となりました。そこで、次代を担う皆さんに自分の目で見て、耳で学び、「戦争の悲惨さ、平和の尊さ」を改めて考える機会とし、平和に対する意識を高めていただくために都内平和関連施設バスツアー（昭和館及び平和祈念展示資料館の見学）を実施しました。この感想文集は、平和学習を通して学んだ貴重な経験と平和への想いを自分自身の言葉で綴ったものです。

戦後78年が経過した現在、世界にはいまだ多くの核兵器が存在し、新たな兵器の開発も進められています。戦争による悲惨な体験を知らない世代が大半を占めるなか、この感想文集を一人でも多くの方にご覧いただき、「平和の尊さ、大切さ」に対する認識を深め、あらためて「平和」について考えるきっかけにしていいただければ幸いです。

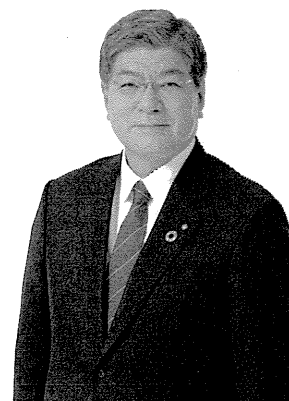
板橋区は、「SDGs未来都市」として、全ての国が取り組むべき普遍的な目標であるSDGs（持続可能な開発目標）の理念を見据えつつ、平和都市宣言記念事業を積極的に推進し、世界の恒久平和を実現するため、様々な機会を捉えて「平和の心」を発信してまいります。

最後になりましたが、本事業の実施にご協力いただきました、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

令和5年11月

板橋区長

坂本 健



目 次

ごあいさつ	1
第1部 中学生広島平和の旅	
1. 行程表	4
2. 団長感想文	5
3. 参加中学生感想文	6
第2部 中学生長崎平和の旅	
1. 行程表	30
2. 団長感想文	31
3. 参加中学生感想文	32
第3部 資料編	
1. 広島	
(1) 広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式次第	57
(2) 平和宣言	60
(3) 平和への誓い	64
2. 長崎	
(1) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典実施要領	65
(2) 長崎平和宣言	67

■広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式出席議員

一 島 ひろし	議員	木田 おりべ	議員
ひはら みちこ	議員	実正 やすゆき	議員
おばた 健太郎	議員	小柳 しげる	議員

第1部

第27回 中学生広島平和の旅



原爆ドーム前にて（広島県広島市）

参加生徒

板橋第一中学校 伊藤 彩夏	志村第四中学校 和田 愛莉	桜川中学校 江田 琴葉
板橋第二中学校 大西 杏仁花	志村第五中学校 谷口 凜	赤塚第一中学校 秋山 楓花
板橋第三中学校 三澤 来実	西台中学校 岡野 愛夢	赤塚第二中学校 前崎 藍香
板橋第五中学校 杉田 花音	中台中学校 熱田 紗英	赤塚第三中学校 西松 万維子
加賀中学校 高山 結衣	上板橋第一中学校 坂本 真彩	高島第一中学校 長澤 夏希
志村第一中学校 片野 莉緒	上板橋第二中学校 天羽 泰庸	高島第二中学校 平田 光
志村第二中学校 島田 菜々子	上板橋第三中学校 川崎 光華	高島第三中学校 西田 拓樹
志村第三中学校 松原 秀翔		

引率者

志村第三中学校 河又 秀敏校長（団長） 堀 響一郎教諭（指導員） 中村 真里菜教諭（指導員）

中学生広島平和の旅 行程表

実施期間 令和5年8月5日～7日（2泊3日）

8月5日(土)

時間	行動内容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:20	板橋区役所 発
8:00	東京駅 着
8:30	東京駅 発
12:30	広島駅 着
12:40	広島駅 発(市電)
13:00	広島市役所 着
13:10	★ヒロシマ青少年平和の集い受付
13:30～17:00	★開会式(開会挨拶、参加自治体紹介) ★平和学習会(被爆体験講話、ワークショップ、発表) ★閉会式(講評)
17:30	ホテル 着
19:00	夕食
22:00	就寝

8月6日(日)

時間	行動内容
5:00	起床
6:00	朝食
7:00	ホテル 発(徒歩)
7:10	平和記念公園 着
8:00～9:00	平和式典参列
9:30～14:00	観光・昼食
15:00	ホテル 着
15:30～17:30	学習会
18:00	灯籠流し体験
19:00	夕食
19:50	灯籠流し見学
22:00	就寝

8月7日(月)

時間	行動内容
6:00	起床
7:00	朝食
8:20	ホテル発(観光バス)
8:30	平和記念公園 着(公園内見学、献花、折鶴奉納)
9:30～11:00	平和記念資料館等見学
11:30	平和記念公園 発(観光バス)
11:50	広島駅 着
12:40	広島駅 発
16:30	東京駅 着
17:30	板橋区役所着・解散式

★はヒロシマ青少年平和の集い事業(広島市主催)

平和の大切さと命の尊さを伝えていきたい

第27回中学生広島平和の旅
団長 河又秀敏
(志村第三中学校長)

8月5日から7日までの3日間、板橋区立中学校の派遣生徒22名と共に、中学生平和の旅で広島を訪れました。令和5年の夏を象徴するかのような酷暑の中、参加した派遣生たちは、現地での見聞きした事、体験した事を余すことなく学び、身に付けようと、本当によく頑張っていました。

私たちは広島市に到着してすぐ、「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加しました。全国の中学生との「平和」と「核兵器」についての話し合いは、派遣生たちも大いに刺激を受け、この旅の代表生徒として学ぶ使命感を再確認したはずです。また、話し合いの後に被爆者体験講話を聴き、原爆によって今まで住んでいた街が一瞬にして炎に包まれ灰となり、家族や友人の死を目の当たりにする悲しみ、たとえ生き残ったとしても被ばくしたことへ不安を抱えながら生きた人々の現実、原爆被害の大きさと悲惨さを生々しく感じ取ったことと思います。

2日目の8月6日には広島平和祈念式典に参列し、78年前に原爆が投下された時刻の8時15分に黙祷を捧げました。派遣生も前日の学習を経て式典に参列したため、広島市民の皆様の平和への願いをより現実味を帯びて受け止ることができたはずです。特に、広島市立小学校のこども代表による「平和への誓い」に大きな感銘と共感を得た様子は、この感想文集の生徒作文をお読みいただければご理解いただけるはずです。

私には、ここから更に派遣生たちの学ぶ意欲が更に大きくなったように感じました。最終日の平和記念公園で原爆死没者慰霊碑への献花、各学校で作成して持ち寄った千羽鶴の奉納などを行う間、同行したバスガイドさんの解説を熱心に聞き入っていた様子や、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館と広島平和記念資料館で、じっくりと時間をかけて展示品を鑑賞し、資料となる写真を懸命に撮影していた様子は、さすが各校の代表生徒だと感心しました。

派遣生たちは、今回の旅で学んできたことを板橋平和の集いや母校の生徒に向けて発表することになります。この発表を見ていただいた方々に、彼らが広島で経験し学んできたことを感じ取っていただければ幸いです。そして、今後この旅に参加した派遣生たちが、平和を希求する板橋区民のリーダーとして、更にはグローバル化が進む世界の人々に向けて、平和の大切さ、命の尊さを伝えていける大人になってもらいたいと願っています。

“平和” という 2 文字。

板橋第一中学校 8年 伊藤 彩夏

2023年、夏。

私は貴重な経験をした。

板橋区で企画された『中学生 広島平和の旅』に参加することとなったのである。元々、戦争や原子爆弾、平和について興味をもっていたことが参加への決め手である。

そもそも、平和とはなにか。争いのない世の中にどれだけの幸せを感じることができているのか。疑問に感じたことをあげるとキリがないのに加えて、これらの問いに対しての明確な答えは存在しないだろう。今回の旅でも明確な答えなど導き出すことはできなかったが、私は限りなく答えに近い考えを生み出すことができた。

旅の1日目に私たちは、『青少年平和の集い』へ参加した。そこは小学生から大学生が全国から集まり、自分の平和に対しての考え方や原子爆弾の存在意義について話し合う場であった。私はそこで歳も違えば住んでいる場所も違う様々な人の意見を聞き、自分の考えや疑問に対して更に深く追求することとなった。

最終的に私が出した答えは下記のとおりである。“平和とは、争いによって人が死ぬことなく明日を迎えることができる確証があること。”しかし、それは一体なぜだ、と問われれば私は答えることができない。なぜなら、根拠のない理論であるからだ。

現状、私は平和以外のなにかを経験したことがない。今回の旅で被爆者体験講話を聞いたり、平和記念資料館を訪れたりしたはしたが、あくまでも見聞によって理解しただけであり、身をもって感じたとは言えない。身をもって感じるができなければ私の考えはひとつの推測に変わりないと思うけれど、平和に対して自分の意見を持つこと自体が重要であると私は思う。人の出す答えに正解はない。人の数だけ考え方や価値観が在ると私は考えているからだ。

私がこの旅で考えたこと、感じたことはこれだけではない。例えば、原子爆弾のこと。事前学習で沢山調べあげたつもりでいたが、やはり現地を訪れなければ得られない視点も多くあった。資料館で実際に遺留品を目にしたが、検索してでてくる画像とは違った緊迫感を感じた。実物からは被爆者のしみ出る想いと当時の悲惨さを語るものが感じ取れた。私は心を痛めた。移動のバスでのバスガイドさんの話。原爆症を患った少女の折鶴の話。涙を流した。この話をきっかけに私は原子爆弾についての考え方を深めることにした。

原子爆弾は絶対に使用してはならない。たった数十秒で人々の幸せを奪い、その後の人生までも狂わせてしまうのである。私はこれから先、原子爆弾と平和について周囲の人々に伝えていきたいと感じた。なぜならそれが私たちにできる最大限の平和を築くことだと思ったからである。

語り部・笠岡貞江さんから聞いたこと

板橋第二中学校 8年 大西 杏仁花

広島平和の旅初日、被爆体験をした語り部・笠岡貞江さんの話を聞きました。笠岡さんは、高等女学校一年生のときに爆心地から 3.5km 離れた自宅で被爆され、原爆が投下されたその瞬間の様子からその後の話まで詳しく聞かせてくれました。

8月6日の朝、笠岡さんの両親は知人の建物疎開作業を手伝うため出かけ、祖母と一緒に留守番していたそうです。空襲警報が鳴り止み、安心して洗濯物を干し終えて、部屋に戻った瞬間、ピカッというオレンジ色の光とともに窓ガラスが割れ、とっさにその場に伏せたそうです。頭を触るとぬるっとした感触で、血がついていたそうです。私達が地震のときに机の下に隠れるように、笠岡さんたちはその場に伏せるという訓練をされていたので、とっさに体が動いたそうです。

出かけていたお父さんが戻ってきたのは、その日の夕方でした。大八車に乗せられたお父さんは、全身黒焦げでそれがお父さんなのかも最初は分からなかったそうです。かろうじて声でお父さんだと分かったものの、触っただけで皮がめくれるなど、ひどい状態でした。体に湧いたうじをはらってあげたり、大好きなビールを飲ませても口から溢れる有様でした。お父さんは2日間苦しみ、亡くなったそうで、自分たちで穴を掘り、火葬したそうです。

お母さんは、人づてに避難場所を聞き訪ねましたが、すでに亡骸は火葬されており、自宅に戻ってきたお母さんは、小さな紙の袋に入った骨の欠片だけでした。

笠岡さんは、一瞬にして両親を失いました。現地で聞く笠岡さんの生々しく悲惨な実体験は、私の心に深く染み、心を打たれました。

平和の旅最終日、平和記念資料館で被爆の惨状を目にしたとき、笠岡さんの両親のことを思い出しました。黒焦げになった人、体全体を火傷して皮がめくれ上がった人、壊れて曲がった自転車、ガラスの破片が刺さった壁など、笠岡さんがどんなに怖い思いをされたのかと思うと、いたたまれない気持ちになりました。

安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから

広島平和記念公園の慰霊碑に、私も献花させていただきました。笠岡さんの両親を殺した「過ち」。それは、人類全体が犯した戦争や核兵器の使用のこと。「過ち」とは、人類が犯した「戦争」を指します。原爆で亡くなられた方々にとっては、慰霊碑の前に立つすべての人々に誓ってほしい言葉なのかもしれません。

被爆後、100年は草木も生えないと言われていたこの地、広島。今は青々とした緑に覆われ、被爆したとは思えないほど綺麗な街でした。そんな街中に立ったとき、ほんの少しだけ救われた気持ちになりました。

後遺症に苦しむ人は今もおられます。笠岡さんをはじめ、みなさんには一日でも長く生きていただきたいと思います。私達のような戦争を知らない子どもたちに、一人でも多く平和の尊さをお伝え下さい。私もこの体験を持って、将来に伝えていける一人になりたいと思います。

平和を伝える

板橋第三中学校 8年 三澤 来実

平和とは何か。私が一番に思い浮かべたのは争いがないことです。「自分の周りは平和だから」と言って平和の尊さをあまり考えたことがなく、平和は自分に関係ないと思っていました。しかし、この平和の旅で平和について考えて、平和の尊さを知ることができました。

1日目はヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。被爆者体験講話では、12歳のときに爆心地から3.5kmで被爆した笠岡さんのお話を聞きました。特に「戦争は人を不幸にする」という言葉が印象に残り、私たちにはこのことを世界中に伝えていく使命があると感じました。ディスカッションでは「あなたにとっての平和とは」「なぜ核兵器があるのか」をテーマに他地域の人と話し合いました。平和について話し合った中でも「戦争によって平和を失ったから平和の尊さがわかる」という意見が印象的でした。話し合いを通して、今私が当たり前前に生きていることがとても平和であることに気づきました。

2日目は平和祈念式典に参列しました。8時15分の黙祷では1分間が短く感じ、一瞬で平和な日常が奪われたことを実感しました。式典で平和宣言や平和への誓いを聞いて、平和を他人事として考えるのではなく自分のできることを考えて行動していくことが大切だと思いました。

3日目は平和記念資料館に行きました。資料館には被爆した方の写真や遺物などが展示されていました。ぼろぼろになった衣服や曲がった三輪車、黒焦げになったお弁当など自分の身のまわりのものがこんなにもなってしまうのかと思うととても恐ろしく、もうこのようなことが起きてほしくない強く思いました。被爆したときの写真を見て、今戦争をしている国が78年前の広島と同じような状況だと思うと、今すぐ戦争をやめてほしいと思いました。また、被爆者の遺影を見ていると「もう二度と戦争をしてはいけない」ということが伝わってくるような気がしました。

この3日間で平和について考え、ご飯を食べることができる、家族や友達がいいて笑い合うことができる、勉強ができるなどの自分の生活が平和であると気付きました。これは当たり前過ぎて気づくことができませんが、当たり前のことではない、とても尊いものです。

私にできることはこの広島での体験を1人でも多くの人に伝えること、戦争の悲惨さと平和の尊さを世界中に発信することです。これが被爆者の思いを受け継ぎ、今を生きる私の使命であると思います。

この思いを伝えるために

板橋第五中学校 8年 杉田 花音

78年前の1945年8月6日、広島県の地上約600mの上空で一発の原子爆弾が核爆発を起こし、広島市の街や当たり前だった日常を一瞬にして破壊しました。私は、広島平和の旅に参加をするまでは原爆で起こった被害について、自分事だとは考えずに原爆と向き合っていました。しかし、平和の旅に参加をし、実際に現地で原爆によって起こった被害を見ると、言葉に表す事が出来ないほど残酷なものでした。

1日目に参加をしたヒロシマ青少年平和の集いでは、原爆被害の概要、被爆体験者の方のお話、グループディスカッションなどを行いました。被爆者の方のお話の中で、原爆が落ちたことで、親や友達、自分の身近で大切な人たちを奪ってしまうという事を聞き、もし自分が親や友達などの大切な人がいなくなってしまうたら自分は耐えられるだろうか、戦争が無い今はどれだけ平和なのだろうかという事を改めて考えさせられました。グループディスカッションでは、「あなたにとっての平和とは」、という議題について話し合い「今、この時間こそが平和なのではないか。」という意見が私にとってとても印象に残り、平和そのものを改めてかんがえられるとても有意義な時間になりました。

2日目の平和祈念式典では、式典開始の15分後の8時15分、原爆が投下された時刻に鐘がなり1分間の黙祷が行われました。目をつぶった時、鐘の音と共にこの平和だった広島はこの一瞬にして壊れてしまったのかと考えると、自分自身とても悲しくつらい気持ちになりました。しかし、『戦争は行ってはいけない、原爆は使ってはいけない』という気持ちを強く皆で願った時間でもあり、今世界で続いている戦争が一刻でも早く終わり、悲しむ人がいない世界を願う1時間になりました。

3日目の平和記念資料館では、原爆に関する資料や展示物を見ました。実際の写真や映像、衣類などを見た時とても惨いものばかりで、言葉に表す事が出来ないほどでした。その中でも、被爆して亡くなった中学生が持っていた「お弁当箱」だった物を見て、とても辛くなりました。その子は、家を出る時お母さんに作ってもらったお弁当を楽しみに持っていたのですが、楽しみだったお弁当を食べることが出来ずに、被爆し亡くなってしまったのです。自分と同年代の子が原爆によって、楽しみだった事も出来ず、未来を奪われ亡くなってしまったのです。その子の気持ち、亡くなる時の恐怖を考えるととても胸が苦しくなりました。それでも、まだ原爆の悲惨さや怖さについて知らない人が世界にいるため、原爆を知らないすべての人がこの悲惨な出来事を知らなければいけないと感じました。

今回の広島平和の旅では、平和の尊さ、戦争の悲惨さを深く改めて学び、今この時間の平和がどれだけ大切なものかを学習、考えることが出来ました。この世界には、原爆について知らない人達が沢山います。そのため、今回自分が学んで分かった事、思った事を友達や家族に話し、原爆について深く知ってもらい原爆についての考えを変えてもらうことが必要だと思いました。自分にとって最大限にできる事を続けていこうと思います。まだ、核兵器は世界には存在します。少しでも、核兵器、戦争・原爆の怖さを知らない人を無くし、この世から恐怖、悲しみを無くすために、自分は努力すべきだと思いました。

ディスカッションを通して

加賀中学校 8年 高山 結衣

広島と長崎に原爆が投下されてから78年、私たちは広島を訪れた。現地で大くさんの学ぶ機会を得ることができた。それぞれの学びの中でさまざまな考えが頭の中を巡ったが、結局は同じ答えにたどり着いていることに気がついた。

広島に到着して、最初に私たちは広島平和の集いに参加した。ここでは、被爆者である笠岡貞江さんが体験談を丁寧に語ってくれた。笠岡さんは当時12歳の高等女学校1年生で、爆心地から3.5km離れた自宅で被爆した。一番印象に残ったのが最後に語ってくれた言葉、「みんなの肩に世界の平和がかかっるとるんです。よろしくお願いします。」私たちのようなお話を聞いた人が心に残し、周りに伝えていくことが必要だと思った。

お話の後、違う学校、違う学年の生徒7人と2つのテーマについてディスカッションした。テーマは、「あなたにとっての平和とは」「なぜ核兵器があるのか」。

「あなたにとっての平和とは」について出た意見は、争いがなく互いに尊重し合えること、治安・衛生が整っておりみんなが笑顔で暮らせること、命の消える争いがないこと、将来を考えそれに向かって進むこと、誰も苦しめないことなどがあつた。このようにディスカッションを行っているなかで、7人の意見に共通点があることに気づいた。それは「今私達ができている生活」ということだった。

続いて、「なぜ核兵器があるのか」について出た意見は、持つことで抑止・守るため、自分の国を有位にするため、言葉で解決できなかった問題を無理やり終わらせるため、利益・自国の強さを求めすぎた結果などがあつた。このテーマのディスカッションでの共通点が、「自国を守るため・恐怖を持たせるためであり、あまり使う目的ではないのではないか」ということだった。

だが、ここで話したことは私たちの班のたった7人の意見であり、またここでも新しい疑問が生まれた。世界中に数えきれないほどいる人々の中には、私たちが話し合った意見と違う意見を持っている人がたくさんいると思う。そのため、今回の2つのテーマを世界中の人々が考え、互いを尊重しながら意見を交換し合うことが必要なのではないかと、私は考えた。

世界の人々が2つのテーマについて話し合ったとしても結局世界中の誰もが求めるのは、「平和」なのではないだろうか。

繋ぐ

志村第一中学校 8年 片野 莉緒

私には重すぎた。あの日を語る被爆者の話、平和祈念資料館の展示物、今も負の遺産として残されている原爆ドーム。あの日を表すすべてのものが。

広島は普通の街だった。街を歩けば子供たちは楽しそうに喋っていて大人はスーツを着て、スマートフォンを片手に歩いている。私はこの当たり前の日常からあの空が、あの地が、かつて火の海になってしまったことを想像することができなかった。

日に日にわかっていく悲惨な過去、実際に足を運ばないとわからないあの日を表す一つ一つのものにあるエピソード。それらすべてが私を苦しめる。なぜ戦争が今も続いているのか。核はなぜ今も多く存在するのか。なぜ誰かの命を奪っても正義だと誇れるのか。多くの疑問が生まれ、でもそれを解決することができない私の惨めさに心が痛くなる。

でも、それだけじゃない。私は平和の旅を通して感動した。多くの方がこの戦争を生き抜き私達に命を、思いを繋げてくれたからだ。被爆者の方は両親を亡くし親の居ない子が集まる施設で過ごしたらしい。本当なら、食べ物もなく勉強もできないこの地獄から抜け出したいくなるのに生きぬいてくれた。私が読んだ広島原爆に関わる本でも少年がもう死にたいと言うのに対し、父は生きろと言う、その思いに私は感動した。

戦後には海外の方が薬をくれたり、家を建ててくれたりしたらしい。誰もが戦争を望み、自分の国が強いというアピールをし、弱い国を自分の領土として領地を広げていくのではなく弱い国を助けるという行為にこれが人の本心だということを理解する。

私に何ができるだろう。現在、被爆者の平均年齢は84歳を超え、当時の状況を知っている方が少なくなっている。そんな中、世界中で戦争は無くなっていない。核兵器の恐ろしさや脅威を訴えているのにもかかわらず、未だに戦争や核兵器は無くならない。何から手を付けていいのかわからない。でも、私には平和を望むという強い意思がある。だから、平和を望むことを諦めない。そんなの絶対無理だと笑う大人たちもいるだろう。それでも構わない。平和を望む人がいる限りこの思いは消えない。これはあの日を経験したすべての人が思っている本音。だから私は、世界中の人が平和だと思える世界を作りたい。

この旅は、私の第一歩。これから私は少しでも多くの人に広島悲劇を風化させてはいけないこと、戦争を起こさないことの大切さを後世に伝えていきたい。

広島からの恒久平和の願いと核廃絶の訴え

志村第二中学校 8年 島田 菜々子

それは今から78年前の1945年8月6日、午前8時15分の出来事だった。今の私達と変わらない平和な暮らしをしていた広島の人々はたった一つの核爆弾によって家族や暮らしを、そしてその後の人生をも奪い去られた。

私は日本から戦争という脅威がなくなった今だからこそ聞きたいことがある。皆さんの考える平和とはどのようなものだろうか。恐らくだが私を含め今までそこまで深く考えたことはないだろう。日本という平和の国に生まれ、世界で唯一の被爆国で生活する私達だからこそ平和とはなにか常に考え、伝えていく必要があると思う。さて、この問いに対して私が意見を述べるのは3日間行った広島平和の旅の感想の後としたいと思う。

平和の旅一日目のヒロシマ青少年平和の集いでは実際の被爆者の方にお話を聞く機会があった。被爆者である笠岡貞江さんは原爆によって両親や多くの友達を亡くして、投下直後の様子を「生き地獄だった。」と語っていた。「被爆当時は自宅にいて、爆弾がさく裂したときは太陽がピカーッと眩しく光ったかのように。当時は建物の下敷きになっていて生きている人がいるにも関わらず、火が迫ってきていて助けることができず何人も見殺しにしたときは辛かった。」私はこの話を聞いて改めて原爆の恐ろしさというものを実感した。78年前に起きた出来事がこんなにも鮮明に私達に伝わってくるということは、それほど原爆が忘れられない記憶として笠岡さんに残っているのだと思った。

平和の旅二日目には、平和祈念式典に出席した。今までテレビや新聞で少し目にするぐらいであまり関心がなかったのだが、実際に出席することで祈念式典をおこなう意義が分かった。8時15分に黙祷を捧げた時、今立っているこの場所が一瞬にして地獄のように変化してしまった、そう思うと胸が苦しくなった。平和式典の中で私は広島市長の「核兵器のない世界の実現」という言葉が腑に落ちなかった。なぜなら一日前、ヒロシマ青少年の集いで、被爆者の話を聞いた後、グループで「なぜ核兵器があるのか」という話し合いをし、私達のグループは核兵器があることで両国の関係を良好に保つことができるのではないかという結論に至ったからだ。もし、そうなのであれば、核兵器のない世界というのはどうやって作れるのだろうか。

平和の旅三日目には広島平和記念資料館を訪れた。そこでは実際に被爆者が纏っていた衣服や洋書、当時の写真が見れた。特に写真を見るのがとても辛く、ケロイドという火傷の痕を見ると当時の様子が窺われた。数千度にも及ぶ熱線で溶けて鉄の塊になった鉄柱、石段に座っていて原爆から逃げられなかった人がまるで影のように石段に残った跡など様々な資料を見た。これらを見て私は原子爆弾を二度と使用してはいけないと思ったと同時になぜ広島市長が「核兵器のない世界の実現」と提唱していたのかわかった気がした。

私の考える平和とは原爆が落とされた過去を学び、核兵器の恐ろしさを世界中の人々が知ることから始まるのだと思う。平和の旅に行った自分だからこそ、このことを伝えられるのではないかと思う。例えばインターネットを通じて世界に原爆に関しての情報発信をしたり、在日の外国人の方に日本が唯一の被爆国であるということを伝える話し合いの場を設けることなど様々だ。まずはこの文章を通して未だ原爆を知らない人に伝えたい。

あの日から 78 年

志村第三中学校 8年 松原 秀翔

令和 5 年 (2023 年) 5 月、G7 サミットが広島県で開催され、唯一の被爆国である日本から、核兵器のない真に平和な世界への実現を目指す、力強いメッセージが世界中に発信されました。そうした中で、私は 8 月 5~7 日まで広島平和の旅に参加しました。

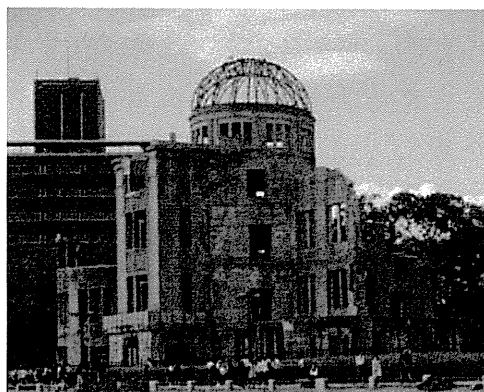
1 日目、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。被爆から 78 年。被爆者の平均年齢は 85 歳になり年々、被爆体験講話をしてくださる方も少なくなる中、笠岡貞江さんのお話を伺いました。笠岡さんは何度も「戦争はいりません。原爆はいりません。」とおっしゃっていました。そして、「1 人じゃできないことも、みんなで考えたら何かできます。」という言葉に、これからの自分たちにできることは何かを考える有意義な時間になりました。

2 日目、平和記念式典に参加しました。私たちを含め、過去最多の 111 か国の代表が猛暑の中、8 時 15 分には黙祷を捧げました。特に平和の誓いを行った 2 名の小学生の言葉が胸に刺さりました。「生き残ってくれてありがとう。命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。」生き残った自分を責め、生きていくことへの苦しみを与え続けた原爆に対して、今を生きる人間としての強い思いを感じました。夜は灯籠流しを行い、たくさんの平和へのメッセージとともに、灯籠が流れていく様子を見ることができました。

3 日目、平和記念資料館を見学しました。白黒の写真や遺品の数々を、当時の様子を想像しながら見学していく中に、原爆投下後の広島を表現したカラーの絵がありました。思わず目を背けたくなるくらい衝撃的で、「戦争」「原爆」という、今まで自分が知識としてもっていた感情とは比べ物にならないほどの恐怖を感じました。悲惨な光景を自分の目で見ることで、今の何気ない日常が平和であると改めて思いました。

今回の旅は、平和とは何かを考えることができた貴重な体験でした。風化させてはならない過去を目の当たりにしながら、見て聴いて学んだことをこれから先へと伝えていくことが、私たちの使命なのだと思います。そして戦争や争いのない世界だけが平和ではなく、相手のことを思う気持ちや、相手の立場になって考えることができる世界=平和だということもわかりました。一人一人の力は小さくても、たくさんの力が集まれば、いつか核兵器のない世界が実現するかもしれません。

「共存し合うことこそが平和である」
未来を生きる私たちの、道標になる言葉だと思います。



平和への願い

志村第四中学校 8年 和田 愛莉

今月 5 日から 7 日にかけて二泊三日の平和の旅へ行った。この 3 日間で私は沢山の思いに触れ、学びを得た。

「死にたくて死んだ人はひとりもない」「戦争は人を不幸にする」これは今回被爆体験を話してくださった方がおっしゃった言葉だ。最初の言葉は私達が今どれだけ幸せなのかを気づかせてくれる言葉だと私は思う。この日本でも事故や事件は絶えずあり続ける。それでも原爆の被害のような大勢の人が一瞬にして命を絶たれる事故、事件はここ最近みられない。原子爆弾が人の人生を変えてしまったのだ。衣食住がままならず、家族をなくした人も多くいた。そのなかで生き残った人たちも放射線に苦しんだ。不幸なんて言葉では収まらない、地獄をその瞬間を生きた人たちは見たのだ。生きた人たちはみな口を揃えて言う。「原子爆弾はこの世から無くすべき」と「戦争を繰り返してはならない」と私はその思いを実際に聞き、伝えなくてはならない。そう強く感じた。

また原爆資料館にて被爆したときの様子、遺品などを見てきた。まさに「火の海」という言葉がしっくりくるだろう。建物は崩壊し、木々は焼け焦げ、残ったのは原爆ドームただひとつ。皆が水を求めて川まで行くがそこで力尽きる者も多くいた。陸は「火の海」川は「死体の山」まさに地獄絵図だった。衣服はところどころ破れているもの、焦げているものが多く展示されていた。沢山の手紙を見た。疎開中の娘を心配する母からの手紙、兄から妹、弟へ宛てた手紙。どれも弱音などは見られなかった。他にも影が写っている石や黒い雨を飲む少女の絵など想像を絶するものも多く展示されていた。

この 3 日間、私は本当に日本であったことなのかと疑いたくなるようなものを沢山聞いて、見てきた。この事実を日本国民は忘れてはいけない。今、脅しで使われている武器は罪のない何万人もの命を一瞬で奪うものだという事を伝えていかなければならない。そして核兵器のない時代へしていかなければならない。一人ではできないかもしれない。しかし一つの国が声を荒げれば聞く耳を持ってもらえるかもしれない。核兵器のない時代へ、被爆した方が安らかに眠れる時代へ変えていかなければならない。そう思わせてくれる貴重な 3 日間だった。

平和の形

志村第五中学校 8年 谷口 凜

広島に原爆が投下され、多くの尊い命が奪われた「あの日」から78年後の朝。私は、広島への原爆投下の目標地点となった相生橋から空を見上げた。「あの日」と同じように、よく晴れていた。いつも自分が見ている空と、何も変わらなかった。

この3日間の平和の旅で、自身の「平和」の形が大きく変化した。1日目のヒロシマ平和の集いで行われたグループディスカッションでは、広島平和学習を行う様々な地域の方々と意見を交換することができた。「自分にとっての平和とはなにか」というテーマで話し合ったとき私は、私自身（民間人）の目線からの「平和」の形を話した。だが、「実際に平和が危うくなったときに戦う兵士としての平和」や、「国のリーダーとして、国民に平和を与える人としての平和」について考える人もいて、「平和」の形はそれを考える人の立場や自分たちの指導者によって変化するという事に気づくことが出来た。

平和記念式典の会場には多くの人が集まっていて、海外からの来場者の方も多数いた。戦没者の方々への献花が終わったあと、8時15分、鐘の音が鳴り響き、黙祷が行われた。沈黙が、1分間続いた。式典の間、会場の外ではデモ隊の声が終始聞こえてきた。原爆によって亡くなった方の霊を慰め、平和を祈るこの式典で、デモを行うのは正直場違いではないかと違和感を覚えた。

3日目の平和記念資料館見学では、写真や絵、動画、そして被爆した物など、「あの日」を物語る多数の展示品があり、思わず目を背けてしまうようなものも多くあったが、一つの展示品から目をそらすことが 広島の「あの日」からも目を背けてしまうような気がして、惨禍を伝えるすべての物たちと向き合い、思い、考えた。今ある現状から決して目をそらさないこと。これも平和への1歩ではないだろうか。

私はこの旅を通して、平和とは、指導者から与えられるものであり、それに抗うことは難しいと知った。だが、声を上げる事はできる。望むことはできる。すぐにとはいかないだろうが、他の人とすれ違うことがありながらも、与えられる「平和」の形は着実に変わっていくだろう。時には自分が考える「平和」の形とすれ違い、与えられた平和に振り回されつつも、それでもまた自分に明日が訪れてほしいと思える状況こそが真の平和ではないだろうか。

趣味ってあたりまえ？

西台中学校 岡野愛夢

「戦争は悲惨とかいうけど、よくわかんない。そんなに強調するもんなの？」

これが広島平和の旅へ参加する前の、私の率直な感想だった。戦争は確かに酷いものだが、長い年月が経っている中で、理解しろと言われてもし難いという気持ちの底にあった。しかし、今の私は、少し違う。戦争を経験していない分、完全には理解できていない。だが、新たな気持ちが芽生えた。「平和の上で今の生活がある」ということだ。例えば、趣味。私は演劇やファッション、音楽や絵を描く事など、芸術に関わるものが大好きだ。これらは、毎日当たり前のようにしている事だが、これが戦時下での生活と仮定するとどうだろうか。世界全面の戦争となると、様々な国で農業等が中止される。すると、原産料の数も減り、物価が高騰するだろう。それにより食べ物から衣料品まで、多くのものが配給制となる可能性もある。また、激しい戦争になってしまうと、学校に行くのも難しくなるだろう。衣料品が配給制になれば、勿論ファッションなんて楽しめないし、絵を描く為の画材も買えない。また、学校に行けなくなると、勉強は勿論、部活での演劇なんて全くできないだろう。

これを今と比べるとどうだろうか。学校に行けて、勉強や部活ができる。画材や服はお店やネットで買えて、食事も好きなだけ摂れる。貴方はこれを当たり前と思うだろうか。私はそうは思わない。国によって平和が保たれていなかったら不可能なことだからだ。戦争によって当たり前は崩されてしまうのだ。まるで夢だったかのように。

ここで、私が旅の中で見たものを貴方に伝えようと思う。「それ」が目に入ったのは、原爆資料館の中だった。入口に入り、様々な写真が展示される中で、円の形に沿って服が並べられている場所があった。円状の服を底面として大きく建つ透明な柱の中を、私はじっと見つめた。よく見てみると、多くの服が破れていたのだ。それは経年劣化によるものかもしれないが、さらに見てみると、その破れた部分の周りには長い月日により茶色くなった血のようなものが見受けられたのだ。声も出なかった。こんなに生々しいのかと。写真や話だけでは想像できない感情が募った。爆弾などが落ち、何かの破片が刺さったりして、服を貫通して肌に刺さり、大量の血が流れる様子が頭に浮かんだ。そんな恐ろしい事が世界中で起こったのだ。

私は、今ある幸せをずっと壊したくないし、他の人にも幸せでいてほしい。今、私が幸せだとしても、他の人がどうかは分からない。だからこそ、今一度平和について色んな人に考えて欲しい。もう一度質問をする。貴方は、今を当たり前と思うだろうか。



平和を守り続ける

中台中学校 8年 熱田 紗英

今から78年前の8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。その瞬間、人々は爆風と熱線におおわれ、街は焼け野原となりました。このように一瞬にして日常を、街を、家族を奪われた広島の方々の辛さ、痛みは計り知れません。原爆は、火傷などの怪我や白血病という病気だけでなく、人々の心までも苦しめ、蝕んでいったのです。

私は『安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから』という言葉が最も胸に残っています。これは、平和公園内にある慰霊碑に刻まれている言葉です。私は、この言葉こそが原爆で傷ついた人々へかける言葉の中で一番、やるせない思いや報われなかった命について痛む心を少しでも軽くすることができると感じました。

この旅を通して私は、平和とは失って初めて気づくものであると考えました。今私達が、過ごしている戦争のない日常は尊く、かけがえのないものです。ですが、一つの原爆によって広島の平和は失われました。原爆は、ただ日々を一生懸命に、ひたむきに生きていた人々の夢や希望、未来や命までも奪ったのです。この悲惨な出来事は遠い昔の事ではありません。またいつ戦争が起きて、原爆が使われるか分かりません。だからこそ、この日を忘れずに後世にずっと伝えていかなければなりません。

原爆の恐ろしさを忘れないでほしいと思い活動を行う、被爆者の平均年齢は85歳となり、戦争の事実を伝える語り手の方が年々減ってきています。そのため、平和な毎日を過ごせていることに対する意識が希薄になっています。私が話を聞いた被爆者の笠岡貞江さんは、原爆が使われたあの日の事を話し続けている理由を聞かれると、「原爆に家族を奪われ、もう思い出したくない記憶だと思っていたが、だんだんとこんな悲しいことが二度と起こらないでほしいという気持ちに変化した」そうです。また、「悲しくて、つらい記憶が今の活動を続ける一番の原動力になっている」と語っていました。そのような原動力で、当時のことを伝え続けている笠岡さんも今年で90歳になるそうです。

私はこの話を聞いて、今度は私達が声を上げ、その事実や想いを多くの人へと伝え、未来の平和を願い、そして守り続けていくことが必要であると考えました。私にできる事は、この出来事を忘れず胸に刻み、今回の旅で学んだたくさんの事をより多くの人に知ってもらおう事です。家族や地域の人、友人、これからの未来を担う人たちに伝えていかななくてはなりません。これが今、私にできる第一歩です。これから、平和のため、多くのことを考え、学び、発信し続けていくことが必要だと考えます。

私が考える平和とは、世界中の人々が何かに縛られることなく、大切な人と普通の毎日を過ごす事ができる世界だと考えます。平和公園にある時計台は、今も8時15分という時に鐘を鳴らし続けています。この音が、時間が、私達に世界平和を願う気持ち、過去にあった決して忘れてはいけない出来事を、改めて思い出させてくれるのです。

「立ち位置」

上板橋第一中学校 8年 坂本 真彩

『昔、広島は血の海と化した』

初めてこの話を聞いたときは、ただ衝撃を受けるだけで、これといった事は感じなかった。いや、感じようとしなかった。それは今自分がそんな目に合ったらなんて恐ろしくて考えたくなかったからだ。今思い返せば、核兵器とは被爆者の方だけではなく、今を生きる私達までも恐怖に飲み込む存在なのだと感じた。

果たしてこの戦争に正義などあったのだろうか。私は今回の旅でそんなことを考えた。日本は自国を守るために戦った。当時の日本からみればアメリカは自国を滅ぼそうとしてくる敵であるため攻撃をするしかない。だがそれは、アメリカの立場からみても同じだ。自国を攻撃してくる敵、日本をどうにかしなければ。互いの国が正義のために戦う。だが、立ち位置が変われば正義の形も変わってしまう。だから、争いはなくなるのだ。被爆体験講話会でお話をしてくださった笠岡さんは「戦争はいらない」という言葉を私達に言い聞かせるように何度も何度も仰っていた。戦争とは憎しみの連鎖を生み出す、目に見えない兵器なのだと私は考えた。だが、戦争が始まったからには自国を守るために勝たなければならない。でも、戦わなければ勝てない。全部全部矛盾している。

争いのない世界では人を殺めたらそれなりの罰が与えられる。だが、戦場になれば話が変わる。より多くの人を殺めたものが英雄となり讃えられる。そんな世界をだれが望んだのだろうか。勝利を大義だと解釈し、ただ一心に人を殺めていく。そんな世界に1つ名をつけるとしたら「残酷」その言葉に尽きるだろう。

現状、ウクライナとロシアが戦争をしている。テレビやインターネットを通じて戦争中の映像や画像がカラー付きで流れてくる。一体誰がカラーで戦争の映像を見る日がくると予想したのだろうか。愚かな凶暴を果たしていつまで続けるつもりなのか。私達が今生活しているときにも、亡くなっていく人たちがいるというのに、私達の力では戦争を止めることはできない。でも、今回の旅を通してそんな私達にもできることがあると学んだ。それは「過去の悲劇を繰り返してはならない」ということを次の世代へと伝えることだ。だが、ウクライナ、ロシアの問題を関係ない国の話と捉えていては、いつまでたっても世界は変わらないままだ。確かに自分が体験したことのないものについて理解を深めるということは、とても難しいことだ。だからまずは、それぞれの立場に立って考えてみて、正義という立場を消してみることが平和への一歩なのだと私は考える。

平和とは

上板橋第二中学校 8年 天羽 泰庸

広島はとても美しく綺麗な場所でした。

『78年前にこの場所に原爆が落とされた』

そのように思えないほど、本当に綺麗な場所でした

この『広島平和の旅』で原爆のもつ恐ろしさを自分自身で体験し、戦争の愚かさを実感し、命の尊さを学ぶため広島平和の旅に僕は参加しました。

この平和の旅では最初に「ヒロシマ青少年平和の集い」というものに参加しました。そこで被爆者の笠岡さんのお話を聞かせていただくことになりました。

「自分は両親を原爆でなくした」そう笠岡さんはおっしゃっていました。その一言は笠岡さんが話の流れに乗っかるように言った言葉でしたが、自分はその一言を聞いてとても衝撃を受けました。広島に落ちた原爆はとてもたくさんの人の命を葬った、そのことは知ってはいましたが、その亡くなった人の中には、大切な家族がいて、大切な恋人がいて、大切な友人がいて亡くなった。そんな悔やんでも悔やみきれない、とてもたくさんの思いが詰まっている、そんな言葉なんだと、僕は強く実感しました。また僕は平和祈念式典に参加しました。そこで聞いたこども代表の言葉『誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私達がつくっていきます』

嘘も偽りも感じさせないその言葉は、僕の心に深く残りました。

僕は正直、この広島平和の旅に自分が行ったところでなにができるのか、なにになるのか、と考えていました。だけど自分より歳が1つ2つ下の子たちが自分からやろうとしている、それを見て、この日常にある平和をつなぐために自分にもできることは絶対にあると感じました。

最後にヒロシマ青少年つどいの時に、各地方から集まってきた子と平和について話し合う場が設けられました。そこで出た『平和は失わないと気づけないもの』

という意見に僕は強く心をうたれました。今日本の中では戦争が起こっていません。けれども世界を見てみると、ロシア軍とウクライナ軍が戦闘を繰り返し、命が意味もなく失われています。今日本の中でも色々なことが起こっています。

だけどそれはそんなに大変なことか、広島で亡くなった人たちは言うであろう

『命が亡くならないだけまし』だと。

平和は失ってから気づいても、もう遅いものだ。

広島に行き

上板橋第三中学校 8年 川崎 光華

今回私は平和の旅に参加し、普段は経験できない貴重な体験や、戦争や核について考えることができました。

1945年8月6日、広島に一発の原子爆弾が投下されました。この日、一瞬にして広島街や生活、そこにいる人達の命は奪われました。私は平和の旅に参加する前、知識としてどのような事が起きたかは知っていましたが、そういうことがあったんだ、という認識でしかありませんでした。

被爆体験では笠岡貞江さんが当時のことを詳しく話をしてくれました。貞江さんは当時、12歳で、私達よりも幼いときに被爆しました。原爆のあと父は酷い火傷を負い全身が真っ黒で誰だかわからない状態で、母のことを心配する言動から父だということに気づきました。病院では助かる可能性の低い患者はみてももらえず、必死に手当をしましたが、息を引き取りました。母は本当に母かもわからない状態で帰ってきました。その後、貞江さんは残った弟と一緒に自分たちで両親の火葬をしました。もし自分だったら、同じことができたかと考えると、答えは出てきませんでした。貞江さんが、両親がいないことで「一番悲しかったことは『ただいま』と言って帰ってきても誰もいないことで、その後は両親の話聞くのがつらくなった」と言っていました。私はその話を聞いてとても悲しくなり胸が締め付けられるようでした。このようなことは、ひとえに戦争があるから起こることです。戦争では当たり前前が当たり前でなくなってしまいます。起きて、食べて、学んで、遊んで、寝る。そんな当たり前前生活を奪ってゆくの戦争です。

今回、広島平和の旅に参加して、私は普段の何気ない生活がとても大切に代えがたいものだ気づくことができました。そして二度とこのような争いが起こらないように他人事ではなく自分事として考えるべきだと感じました。だからこそ、一人一人が原爆や戦争への理解を深め、平和の大切さに気づけば世界平和につながるはず。そのために私はできるだけ多くの人にこのことを伝えていきたいです。そしてできるだけ早く戦争や核が必要なくなり世界が平和に近づくことを願います。

平和への光

桜川中学校 8年 江田 琴葉

私は、3日間広島平和の旅に参加しました。広島の人々がどれだけ悲惨で苦しい思いをしたのか、また平和の尊さについて学びました。この旅に行く前は、原爆ドームがあるぐらいしか分からず、あまり平和について考えたことがありませんでした。しかし、平和の旅を通して、原爆や平和について考え、今まで以上に平和への意識を深めることができましたと思います。

広島青少年平和の集いで被爆者の方のお話を聞きました。その中で特に印象的だったのは、「被爆体験の話を通して、あなた達に未来を託しているんだからね」と何度も言われ、後世に伝えていく役割を強く意識しました。

また、ツアーガイドさんに教えてもらった原爆の塔の上にいる女の子の像を私は初めて見ました。その像は、貞子ちゃんという女の子で小さい時に被爆にいました。原爆の放射能によって白血病になってしまい、病院で闘病生活を送ることになりました。なかなか良くなるので、貞子ちゃんは折り鶴を折り始めました。折り鶴を沢山折って早く病気が治るようにと願っていたそうです。それを聞いて私は、なんで全く関係のない小さい女の子が一発の爆弾でこんな大変な目にあわないといけないのかと感じました。そして、原爆の悲惨さを実感しました。

2日目に平和式典に参加しました。その時に、広島の子どもを代表して2人の子が選ばれました。その子たちが、平和の誓いで言っていたことで印象に残っている言葉があります。それは、「生き残ってくれてありがとう。」「命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。」です。この言葉が私には、今生きていくことは幸せなんだと改めて感じることができました。幸せは、この今生きていくこと、当たり前前に生活できていることなんだなと思いました。また、核兵器によってどれだけの人が苦しめられてきたかこの平和式典を通して感じることができ、学ぶことができました。

この3日間で平和について学ぶことができました。人それぞれで平和をどう捉えるか違うと思います。行ったときのことをいろんな人に伝えてみんなに考えてもらいたいです。平和について少しでも興味を持つことで世界が少しでも変わるのかなと思います。また、核兵器を所持している国はまだ結構あります。これをなくすためにはどうすればいいのか、難しい課題ではありますが、考えていきたいです。

平和記念公園にある「平和の灯火」は世界中が平和になってこの世から核兵器がなくなったら火が消えるそうです。早く火が消えることを願っています。

最後に、被爆を受けた方々の平均年齢は85歳を超えました。これは、この悲惨なことを伝えられる人が減っていつにやってくるようになります。今回、わたしたちは平和の旅に参加してどんどん次の世代に伝えていく必要があります。この伝統が途絶えないように私たちも頑張りたいです。

「広島から世界へ」

赤塚第一中学校 8年 秋山 楓花

皆さんは今、幸せですか。8月5日、広島。あの日被爆した笠岡さんは言いました。「あなた達は幸せだよ」

私達は8月5日から7日まで、広島で平和について学びました。まだ広島に行く前は、きっとまだ希望のある話も聞けるはず、と思っていました。しかし笠岡さんの話を聞き、そんな話は夢物語だったと気づきました。

笠岡さんが被爆したときの年齢は12歳。その暮らしはあまり裕福ではなく、食べ物は麦ごはんにお湯を少しだけ入れたすまし汁、服はとても買える値段ではなく、お下がりをもらったり、配給された布で自分で縫っていたそうです。また、中学生になれば働く必要があります。

そして、1945年8月5日、広島街に原爆が投下されました。これにより約14万人が亡くなり、亡くなった人たちの中には笠岡さんのご両親が含まれていました。それだけではありません。病院に行っても医者には見てもらえず、川へ行けば水を求めて溺れて亡くなった人たちが川にたくさんいました。さらに、通行人はまるで幽霊のように皮をだらんと垂れ下げながら歩き回り、道にある死体はとても惨かったそうです。

私達はたまたま今生まれることができました。しかし、この話を聞いてもしこの時代に生まれていたら、当たり前のように衣食住が揃っている現代社会のように豊かな暮らしができていることに深い喜びを感じました。また、それと同時に私のようにまだ原爆を甘く見ているような人もたくさんいるだろうとも思いました。

皆さん考えてみてください。この地獄のような現実を前にしても、戦争があること、核兵器があることに疑問を感じませんか。笠岡さんは「原爆は悪意の塊だ」と言いました。それはゆるぎない事実です。どんなことがあっても、武力を駆使すれば沢山の不幸をうみます。そしてそれは私達にも言えると思います。例えば意見が相手の人と食い違ったとき、武力を利用したらどうでしょうか。きっとそれは相手も傷つき、最終的に自分も傷つきます。でももし、そんなことがなくなればきっと、相手の行動によってもたらされた不幸はなくなります。そしてそれが世界レベルまで広がれば戦争のない、平和な世界と言えると思います。

私は今後、平和な世界に生きていきたいです。そんな世界を実現していくため、これからも戦争についての理解を深め、平和について考えていきたいと思ひます。

一步の勇氣

赤塚第二中学校 8年 前崎 藍香

1945年8月6日午前8時15分に原爆は広島へ投下されました。今まで広島で過ごしていた一人ひとりの日常がなんの前触れもなく、一瞬にして奪われてしまった決して忘れてはいけない出来事です。しかし、今現在忘れてはいけない出来事でもあまり詳細を知らない人が多いと考えられます。私も実際原爆に関する本に出会って興味を持って読まなければ原爆についての知識などは学校の授業で習うだけでほとんどなかったと思います。その知識が少しでも養われたからといっても、見えないような背景はその他にも山ほどあります。もっと詳しいことを知りたいと思い広島平和の旅に参加しました。

広島に着いたばかりのとき、私はここに原爆が落ちたか疑ってしまうほどの綺麗な町並みに衝撃を受けました。そしてその地に足を踏み入れ歩いているときも今歩いている場所一面が焼け野原になっていたとは考え難く、とても不思議な気持ちでした。

ヒロシマ青少年平和の集いでは、原爆の概要と笠岡貞江さん(被爆当時12歳)が当時の原爆の裏で起こっていた詳しい背景をお聞きしました。笠岡さんの話で、原爆が起きて77年も経っている今でも鮮明に当時のことを覚えていて伝えられることに驚きました。覚えているということはそれほど心に刻み込まれたのだとわかりました。そこから本当に原爆は恐ろしく、被爆者の体と心に77年経った今でも残っている出来事だと強く実感させられました。被爆体験講話を聞いていると、稀にどこかの言葉を反復させたりして強調しているときがありました。私はその中でも「我慢」という言葉に心が動きました。自分がしたくないようなことを我慢して、我慢して、我慢して…を戦時中の当時はずっと繰り返していたと思うと私だったら耐えられる気がしません。笠岡さんは兵隊さんなどの自分よりもっと我慢して、苦勞している人を考えたら我慢できたと仰っていました。何より兵隊“さん”と呼んでおり、敬意が心の奥底に今でも残っていると思うと胸の奥が熱くなりました。

そして、笠岡さんは最後に「みんなに世界の平和がかかっている。平和とは、失わないと築けないもの。」と仰っていて、戦時中にみんなが支え合って復興を目指していたように現代でも支え合っていくことが大事と言われているような気がして強く印象に残りました。

このヒロシマ平和の旅で学んだことを、知っただけでは終わらせずに、みんなに伝えることはもちろん、率先垂範してまずは自分から世界を平和にできる一步を踏み出せるよう努力します。

なんであなたにこわされないといけないの。

赤塚第三中学校 8年 西松万維子

あの日たしかに明日をうばわれた人がいる。

1つ目は被爆体験講話での笠岡貞江さんのお話です。8月6日のあの日、被爆し熱線で真っ黒に焼かれてしまっていたお父さんに「みずをくれ…」と言われた際、火傷をした人に水を飲ませると死んでしまう噂があったため「井戸の水が全てなくなっていて水がないんだ」と嘘をついてしまったというお話です。この話を聞き、もし私が笠岡さんの立場だったら、と考えました。私だったら「火傷に水はダメだ」と本当のことを言うてしまうだろうな、と思いました。笠岡さんは、父が水を飲んでもっと苦しい思いをしてしまわないように「水はない」と諦めをつけさせ、もうこれ以上苦しさが少しでも重ならないようにとうそをついたのではないかと思います。

2つ目は灯籠流しです。暗くなったところに灯籠を見にいってみると、灯籠の灯りがきれいに点いていたり、消えてしまっていたりするものもありました。灯りの消えた灯籠の写真をカメラで撮ってみると、真っ暗でよく見えなかったため、フラッシュをつけて再度撮りました。すると少し色のついた白くまるいひかりの粒が写真一面に写っていました。「ぼやけたかな」と思いもう一度撮ると、また同じまるいひかりが一面に写っていました。私はこのまるいひかりのつぶは、もしかするとこの地で原爆をおとされて亡くなった人たちの声なのではないかなと感じました。

この平和の旅に参加し、核兵器はこの世に必要なものだとは確信しました。参加する前は、核によって守られている国があるのだから、核がなくなったら平和がくずれてしまうのではと思っていました。ですが、そもそも核というものがなければ、核で守るということもないのです。あの日から78年間、運良く核がおちてこなかっただけであり、核兵器は今の時代、ボタンを押すだけでどこにでもおとすことができます。また、ヒロシマの時はわざわざ上空にいったおとさなければなりませんでしたが、今はボタンをおせば計算された速度や角度でおちてきます。つまり私たちの日常はいつ、どこでも、誰であっても壊すことができます。これを恐ろしいと思うのは私だけでしょうか？これを悔しいと感じるのは私だけなのでしょうか？

78年前にあのような悲惨な出来事があったというのに、あなたは何も学んでくれない。学ぶどころか繰り返そうとしている。あなたにとって顔も知らない私達は何かしてしまったのですか、

明日壊されるかもしれないけれど、私には大切な明日がある。だから私は後悔のない毎日を送っていこうと強く思います。

なんであなたにこわされないといけないの

広島平和の旅

高島第一中学校 8年 長澤 夏希

私はこの旅で色々なことを学び、色々な場所へ行きました。最初は違う学校の人たちと班を組んで行動するのに少し慣れずに、不安があったのですが、違う班の人ともたくさん会話をし、とても楽しく有意義な旅を過ごすことができました。

一日目は、東京駅から新幹線で広島に行き、ヒロシマ青少年平和の集いに参加しました。また違う地区の学生たちと班になり、被爆体験証言での講話を聞き、「あなたにとっての平和とは」「なぜ核兵器はあるのか」についてディスカッションを行いました。たくさんの人と平和への考え、核兵器のあり方を話し合い、グループでたくさん意見を出し合い、考えを深めることができました。

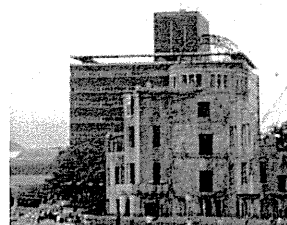
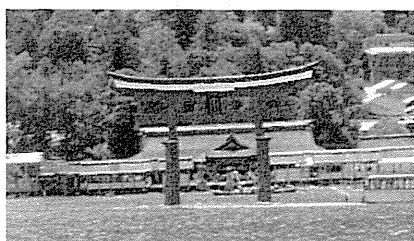
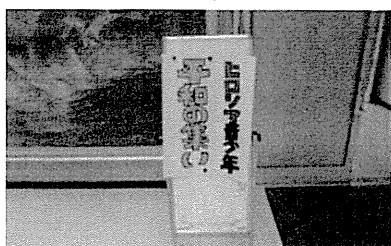
二日目は、朝から平和記念公園に行き、平和記念式典に参加しました。招待客がたくさん参加しており、およそ2800人が、原爆死没者の霊を慰めるとともに、世界恒久平和を祈念するために訪れていました。来賓の方の挨拶で岸田総理の演説を聞いたことで、少し気分が高揚しました。その後、原爆の投下目標になったT字の橋、相生橋を渡り、原爆ドームを見て回りました。当時の戦争の悲惨さを感じることもできました。

次に宮島へバスとフェリーで厳島神社を見にいきました。宮島へは、バスガイドさんに案内され、歴史や厳島神社の作られ方について説明してくださいました。とても威厳があり、きれいな建物でたくさん写真を取りました。夜には、灯籠流しを体験しました。みんなの願いや平和について書かれており、私自身も二度と戦争を起こして欲しくないという願いを込めて灯籠を流しました。

三日目は、平和記念公園と広島平和記念資料館に行きました。公園をバスガイドさんに案内され、公園に関することを聞くことができました。式典を行った場所にもまた足を運ぶことができ、前日のことを思い出しながら感慨深く公園を見学することができました。資料館には、被爆時、被爆後の写真や絵、焼けてしまった服、曲がった鉄骨などたくさんの当時の資料があり、とても悲惨な光景に衝撃を受けました。私が一番衝撃を受けたのは、二人の姉弟が放射能の影響で毛が抜け落ちてしまった写真でした。

私は、この旅に行く前は、平和についてあまり考えたことがありませんでした。しかし、今回で私達が平和に向けて何ができるのか考えるようになりました。そして、この旅で学んだこと、感じたことをたくさんの人に発信して行きたいと思います。

私は今回、資料館で全身火傷を負った人、放射能により苦しめられる人などの写真を見ました。さらに、被爆体験証言の講話を聞いて、被爆者はほとんどの人が恐怖と苦しみを持って生きてきたのだと感じました。そこで、この旅で改めて思ったことは「私達が送っているこの生活はとても幸せであること」、「原爆はこの戦争で亡くならなかった人も苦しめる兵器であること」です。この体験を忘れることなく、世界から核兵器がなくなることを切に願い、世界が平和になることを強く望みます。



負の遺産を受け継ぐこと

高島第二中学校 8年 平田 光

私は原子爆弾の恐ろしさを伝えていくために、負の遺産を受け継いでいきたいです。今回の旅に参加して強くそう思いました。私は事前学習のテーマで原子爆弾の威力とその被害について調べることになり、そのときから広島平和の旅では原爆資料館や現在の広島の風景から原子爆弾の被害やその後の復興について調べ、どのように伝えていくかを考えたいと思っていました。

実際に資料館に行ってみると、あまりの残酷さに言葉を失いました。入って奥の方に原爆の証拠品の展示がありました。黒焦げのお弁当箱、全身やけどでふくれている遺体、皮膚がはがれている兵士の写真。発表の資料として写真を撮ろうとしたら、気分が悪くなってしまうほど怖かったです。今日の広島の街はかつて原爆が落ちたと思えないくらいきれいに整備されていて、路面電車や観光名所もありますが、それらの資料は原爆が落ちて、広島が焼け野原になった当時を私たちに見せているようでした。もし目の前でこのようなことが起きてしまったらと考えるととても恐ろしかったです。そして、もう二度と同じ事が起こらないように核兵器は使ってはいけないと訴えていきたいと改めて思いました。

しかし、私が伝えていける範囲には限界があり、資料からわかったことや人から聞いたことしか伝えることができません。もちろん学んできたことや感想を伝えることも大切だと思いますが、それでは私の意見を伝えるだけになり、それぞれが平和について考えることは難しいと思います。そこで、これらの資料だけでなく原爆ドームや平和の灯などの実際に見て感じられるものをこれからも大切にしていけたらいいのではないかと、思いました。いま、被爆者の平均年齢は85歳を超えていると言われていています。私も語り手として今後メッセージを発信していきたいと思いますが、いつ途絶えてしまうかわかりません。語り手がなくなったとき、また核兵器を使った戦争が起きてしまう可能性もないとは言いきれません。なので、私は核兵器の恐ろしさを何よりも鮮明に語れる負の遺産を受け継いでいきたいです。広島慰霊碑には「安らかに眠ってください 過ちは二度と繰り返しませぬから」とあります。この言葉が本当になるようにしていきたいです。



真の平和への道

高島第三中学校 8年 西田 拓樹

僕は今回、平和の旅でしか経験できないような貴重な体験をたくさんさせていただきました。

僕が印象に残っているのは、「核抑止論」という考え方です。核抑止論とは、凄まじい破壊力をもつ核兵器を保有することが、戦争の抑止となり、ひいては国家の平和に繋がるという考えのことです。

僕は、1日目の青少年平和の集いのグループディスカッションでの発表でこの考えを知ってから、頭から離れなくなりました。この発表を聞いた際、核抑止論の考えを完全に否定できるような言葉が出てこなかったからです。そして、核兵器の存在を認めている人がいることに驚きました。僕も一瞬、確かに、とって思ってしまった。しかし、世界の恒久平和には核兵器廃絶が必須であることは紛れもない事実です。結局、いい言葉が見つからないまま、1日目が終わりました。

2日目は、平和記念式典に参加させていただきました。そこでの広島県知事の言葉で、やはり「核抑止論」は間違っているということに気付かされました。その中に、「あなたは、今この瞬間も命を落としているウクライナの市民に対し、責任を負えるのですか。また万が一核抑止が破綻し、世界で核戦争が起こったら、全人類の命、地球上の全ての生命に対し、責任を負えるのでしょうか。核兵器は、存在する限り人類滅亡の可能性をはらんでいる、というのがまぎれもない現実です。その可能性をゼロにするためには廃絶の他ない、というのも現実なのです。」という言葉がありました。

そこで、僕はとても重大な事に気づきました。それは、どんなに過ごしやすい平和であったとしても、核抑止論によりつくられるのはかりそめの平和であり、真の意味での平和ではないという事です。そして、その平和ではいつしかもう一度原爆を使用する機会が訪れ、再び広島や長崎のように多くの人々の命が奪われる、二度と起こしてはならない過ちを繰り返すことになってしまうこともわかりました。

3日目は、広島平和記念資料館を見学しました。どの展示物も当時の状況が、いかに悲惨なものであったかを強く物語っていました。そして、今までの自分の捉え方の甘さを痛感しました。今回資料館を見学して、核抑止論などと愚かな事は、決して言うてはならないのだということを強く感じました。

僕はこれから、3日間を通して得た貴重な経験を、伝導者としてしっかり伝えていきたいです。2度と同じ過ちを繰り返さないために。

最後に、このような機会をくださった板橋区職員の方々、引率してくださった先生方、本当にありがとうございました。

